

私の戦争体験

吉岡 宜子さん（昭和13年生まれ）

小学校（当時は国民学校）入学前、私は東京の神田、昭和通りの秋葉原駅付近に住んでいました。しかし、戦争の影響で普通の日常が一変してしまいました。幼稚園に通う為、救急袋を背負い防空頭巾を被って歩いた事を思い出します。当時、食事は鍋を持って配給の雑炊、空腹の痛みは今も忘れられるものではありません。

大戦末期は、家族で埼玉の母の実家に疎開しました。4年生の姉は学童の集団疎開で同じ埼玉に来ていました。疎開先の埼玉から、我が家のある東京の神田方面の焼ける空の燃え盛る明るさ、日光街道を焼け出され、リヤカーに老人や少しばかりの家具を載せた人々の歩く姿が、今でも脳裏に焼き付いています。今考えると、電気のない暗闇のぬるいお風呂でも入れた事は、改めて贅沢な時間だったと感謝します。

3月10日の東京大空襲で神田の家は全焼、「蔵」だけが焼け残りました。戦火の中、大切にしていた雛人形の顔もボロボロになってしまい、とても悲しい気持ちになりました。

住む家もなくなってしまい私たちが家と食べ物を求めていた時、父が食糧不足を何とかできないかと印旛沼の「もく」（藻や水草）の研究に来て、北須賀の空家を見つけ、成田に、家族で疎開し移住する事になりました。

3月のまだ寒い日、ゲートル姿の父、弟を背負ったもんぺ姿の母が、私と妹の手を引き松崎駅で降りました。地元の農家の方が、牛車にむしろを敷いて、私達家族を迎えに来てくれました。用意して下さった白米のおにぎり、沢庵、印旛沼で採れた魚の甘露煮の大ご馳走。牛車に揺れながら頂いた白米の美味さ、人の優しさを忘れる事は出来ません。松崎駅から約5キロの道のりは、沼には白鷺しろぎぎがいて、その長閑な田園風景にほっとしたのを覚えています。

引越し直後、祖父の葬儀中に B29 が低空飛行してきて、その爆音で老婆の1人が亡くなりました。

北須賀に疎開して10日後、分校に入学出来ましたが、帰り道も解らず迷ってしまいました。分校では、4学年で3教室しかなく、午前と午後に分かれて、又3、4年生が一緒の授業の日には、お寺のお坊さんが先生でした。時には、近くの薬師堂さんの庭で、おはり板を机代わりにして授業をした事もありました。

学校の帰り道、そろばん袋に、椎の実を収穫し、炊いてお腹も満たしました。お弁当の時間は、持ってこられない子、さつま芋だけの子もいました。そんな食べ物のない時代でしたが、5歳・7歳のお祝いで食べた「芋あめあんこ」の美味しさは今でも忘れられません。

5年生からは本校に通い、4キロの道を雪道も下駄で登校し、途中で鼻緒が切れ裸足で泣きながら家に帰りました。衣類も食料も乏しく、台所や風呂で使う燃料は、休みの日に山で木々を集めました。光が乏しく、はだか電球を持ち歩きました。

中学校へは、自転車に2歳下の妹を後ろに乗せて通学しました。そんな中でも、楽しみは印旛沼で父から水泳を習い、夏は毎日のように泳ぎに行きました。当時、貴重なタンパク質である海老、カニ、タニシ、らい魚と私達家族の食卓を支えてくれた印旛沼は、食の宝庫でもありました。また、家で山羊を飼い、自分で世話をし、乳も絞り有難く頂きました。

東京で糸問屋を営んでいた生活から、想像もしていなかった田舎での生活と慣れぬ農業に戸惑う両親。私も子守り、食事作り、水汲み、薪割り、お使い、山仕事、農業の手伝いを出来る限りしました。大人も子どもも本当に大変な戦後でしたが、まわりの人達の力添え、家族全員の協力で苦難の

時代を何とか乗り越える事ができました。

疎開し移住した北須賀で、縁があり、夫と結婚し今日に至っています。今では、この素晴らしい自然豊かな北須賀でのんびりと暮らせ、あの戦争中の父の決断に感謝しています。

最後に終戦から約 80 年。「長崎を最後の被爆地としたい」悲劇を二度と繰り返さない戦争のない「平和な世の中」であり、子どもや孫、ひ孫達が安心して暮らす事の出来る日々であって欲しいと切に願っています。

(原文のまま掲載しています)